

——いつかどこかの、誰かの所領。

——在ったかもしれない、誰かが結んだ話。

「——敵軍、来ましたッ！」

千狐の叫びが、本陣に座す殿の耳を震わす。それを受け、殿はすかさず、配下たる城娘たちの名を呼ぶ。兜との闘いを始め、幾月を経ようとも、この瞬間は変わらぬ緊張に満ちている。

しかし、その呼びかけには、城娘たちへの確かな信頼があった。それはまた、名を呼ばれた城娘たちも同様だった。

「はい！ 柳川城、参ります！」

まず応えたのは、柳川城だった。既に敵軍の編成は、事前の偵察である程度判明している。開けた草原の中、まず、多数の桃形兜が進軍してきた。その群れを、高台に座した柳川城の連弩が、容赦なく穿つ。

断末魔さえもなく、桃形兜の姿は霧のように消え失せていく。しかし、その同朋の間を縫い、大文字形兜、釘形兜が歩を進めていた。柳川城の連弩では、多数の敵を一度に狙える代わりに、桃形兜よりも頑丈な彼らを屠る力が足りない。

道は、殿の本陣へと続いている。

「伊予松山城さん、春日山城さん、お願いします！」

「ええ！ 毘沙門天の力、お見せしましょう！」

「了解したわ！」

本陣の方角を振り返った柳川城の声を受け、道に陣取った二城が応える。

「沈勇の槍捌き、受けてみなさいッ！」

まず煌めいたのは、伊予松山城の槍だった。やくもよって鍛錬された穂先は、容赦なく兜たちの体を切り裂く。柳川城の攻撃を耐えた兜も、次々と地に臥せ、或いは息を枯らしながらも先に進む。だがその足も、春日山城が振るう蛇刀の前には全く無力だった。

「ふふっ、先に進めるとは思わないことですね！」

既に時刻は夕暮れに近い。鬱蒼とした森の中、唯一開けたこの場所に本陣を取ったのも、それを踏まえてだった。この状況ならば、先の見えぬ森よりも、危険を押しでも確実な道を来るだろう、という春日山城の読みが当たったのだ。

三城の連撃によって、偵察で分かっていた兜の多数は、瞬く間に屠られていった。されど、兜とても戦略というものはある。

「——来たッ！」

三城が護る道とは、別の方角。森を切り分け、突如として出現したのは、二騎の騎馬型兜。足場が寛束ない森を、敢えて不向きな騎馬で選んだのは、兜にとって奥の手であったのだらう。

騎馬特有の、凄まじい速度を以て二騎は本陣へと駆けてくる。三城のいる位置では、弩も

槍も刀も、彼らには届かない。

だが、本陣の目の前には、ひとりの城娘の姿があった。

「――やれやれ。まだ研究書の途中だったんだがな」

息を吐き、だが楽しい微笑みと共にゆっくりと立ち上がったのは、フランケンシュタイン城。眼前へと迫った兜を見据え、その笑みはより深く、愉悦へと染まる。呼応するように、彼女へと満ちる霊力も高まっていく。

それを認めたのだろう。二騎の動きが、微かに、だが明瞭に揺れた。それでも、尚も止まらぬ蹄の音をかき消すように、フランケンシュタイン城の叫びが響く。

「万物融解液で、物質と化すがいいッ――！」

「――皆さま、此度の遠征もお疲れさまでした！」

全ての敵を屠り、帰り着いた所領。満面の笑顔の千狐と、同じく微笑みを浮かべた殿が、四城へと労いの言葉を掛ける。

「今回は、フランケンシュタイン城さんのご活躍が見事でしたね！」

「ふふふ。カスガヤマ城がああ配置を選んだからだろう」

「なんの。偵察に行つて頂いたのは柳川城さんですからね」

「ですが私も、伊予松山城さんの道後温泉の力で、長く前線にいらることができました」

「ありがとうございます。この後も温泉で疲れを癒しましょうか」

四城それぞれ、屈託なく、同朋の健闘を讃える言葉を口にする。その様子を見る殿と神娘たちの頬も、誇らしさと微笑ましさに、柔らかく緩んだ。

殿の居城であり、すべてのはじまりとなった柳川城。

幻とさえ言われる、困難な顕現を果たした春日山城。

高い霊力を持つ、世に名高い現存十二天守のひとり、伊予松山城。

そして、独特ながらも冴えた知性と高い武力を併せ持つ、フランケンシュタイン城。

この四城はみな、殿の戦いが始まった当初から所領を支えてきた、古株の面々であった。生まれた土地も、掲げた旗も、昔日の戦の記憶も異なる。それでも、否、だからこそ、四城は共に肩を並べて戦ってきた。月日を経て、所領に数々の城娘が顕れた今となっても、重ねてきた絆は変わらない。

面々の数が増えるほど、戦を経るほど、どうしても、主たる殿には相棒といふべき存在ができるものである。

だが殿は、苦楽を共にしたこの四城に差をつけることはしなかった。四城もまた、誰が一番の存在であるのかなど考えることも争うこともしなかった。必要な時に、必要なだけの信頼を示す言葉を使う以上のことはしない。分かっているから、その必要もない。

それを知る他の城娘たちも、彼女らはそうだった在り方の仲間なのだと、敬意を払いこそすれ、他の感情を抱くことなどなかった。

だが、ある日。茶飲み話の途中に出た、千狐の一言。それをきっかけに、所領の均衡に、小さな変化が訪れる時がやってきた。

「――巷では、城娘の皆さんの人気投票、なるものをしていているそうですよ」  
天守、と仮に名を付けている所領の大座敷。

その場に集った殿とやくも、そして四城。十二の目が、千狐に向けられる。元々は、城娘の頭数が少なかったころ、軍議の延長線上で始まった交流の場だった。主たる目的は、他者と打ち解けづらかったフランケンシュタイン城や、伊予松山城のためでもあったのだが。それが今になっても、何んとなしに慣習となって続けられているのである。

「に、人気投票ですか……」

「結構お祭り騒ぎになってるらしいがや！ みんなえらい有名になっただに〜」

「ええ！ 皆さんのこれまでのご活躍あってこそですね！」

数々の戦を経て、殿と城娘一軍の知名度も着々と向上しつつある。千狐とやくもにしてみれば、確かに喜ばしいことであろう。これを所領の城娘たちに話せば、同じような反応を示す者もいるかもしれない。

とはいえ、この所領の筆頭たる四城はといえば。

「ふうん。まあ、いいことかもしれないわね」

茶を飲みながら、平淡な声色でそれだけ言った伊予松山城をはじめ。先程から研究ノートに一心不乱に何事かを書き込んでいるフランケンシュタイン城、合戦シミュレーションのモデルを前に長考する春日山城。そして、一度言葉を発したきり、ちらりと殿を見ただけの柳川城。

四城いづれも、大きく興味を惹かれた様子ではなかった。強いて言えば柳川城であるが、これはまた別種の感情の揺れであろうことは、神娘たちの目には明らかである。

発端である千狐もまた、彼女らとは付き合いが長い。各々の気質を知ってはいつつも、目を丸くする。

「あ、あれ？ み、皆さんは、あまりご興味はないのですか？」

「……全くない、とは言いませんが」

シミュレーションの盤上、兜に見立てた駒を動かしつつ、春日山城がくすりと笑う。形の良い、はつきりとした眼が、それとなく集った四城の顔を見遣る。

「私は躑躅ヶ崎館に勝てれば、それで十全かと」

「Ich auch(同じく)。まあ、私には争う相手もないがな」

ノートから目線だけを上げ、フランケンシュタイン城がくくくと笑う。この所領には、彼女と同じ独逸出身の城娘はいない。いたとしても、フランケンシュタイン城の気質からして、そんなことよりも研究だ！ というところであろう。

伊予松山城も、温泉饅頭に頬を膨らませつつ、うんうん、と頷く。所領に来た当初、温泉好きを隠そうと必死だったころの面影は全く無い。勧められた柳川城も、小さい口でつまみ

ながら、何度か首を縦に振る。

しばらく、沈黙が落ちた。それを破ったのは、「……まあ、この四人の中で、というならばまた別じゃないか？」という、フランケンシュタイン城の一声であった。

すぐには言葉の意味が飲み込めなかったのであろう。きよとん、とした顔で目線を向ける面々。それを意に介さず、鼻歌交じりに、フランケンシュタイン城は手元のノートを破る。

更にそれを折り曲げ、四枚の短冊状に切り裂く。そして、自らの手元に一枚。残った三枚を、ほら、と他の城娘たちに渡す。

「ええと、フランケンシュタイン城さん、これは？」

紙と彼女の顔を見比べつつ、柳川城が問う。片手にはまだ、食べかけの温泉饅頭があった。「簡単なことだ。この紙に、それぞれ自分が大切に思う相手の名前を書けばいい。人気投票、というヤツは、そういうものだろうか？」

「ばく。……へえ。フランケンシュタイン城にしては、……ばく、……珍しいことを……ばく、……言い出すわね」

二個目の温泉饅頭を口にしつつ、伊予松山城が言う。それを受けて、フランケンシュタイン城が声を上げて笑った。

「研究はあらゆる要素から進歩する。物理の材料だけではなく、感情というものも変わらずな。これもまた、いつかは材料になるだろう」

「ふふ。成程、これもまた面白そうですね」

言うが早いか、春日山城は既に紙に筆を走らせ始めていた。生真面目ではあるが、どこかそういう性格の城娘だった。

それを見た伊予松山城も、続いて筆を取る。柳川城はひとり、少し迷っている様子だったが、フランケンシュタイン城がほれ、とペンを渡す。私はもう書き終えたぞ、ととんとんと机に置いた紙を叩く。

柳川城の目は、何度か、紙と、そこにいる面々——殿と、城娘たちを行き来する。やがて意を決したように、だごどこか晴れ晴れとした顔で、柳川城の指も、ペンを動かし始めた。

「……さて」

しばしの間の後、机の中央には、四枚の紙が出揃った。すべて裏返しになっており、誰が書いたかも、何が記されているのかもわからない。城娘たちはみな、沈黙を守っている。緊張した、しかし奇妙な穏やかさのある静寂であった。覗き込む神娘たちは、思わずごく、と息を飲む。

しかし。

「……じゃあ、解散しましょうか」

そう言うと、伊予松山城がすく、と腰を上げる。

「ええ。そうですね。私もそろそろ、坂戸城たちと明日の出陣について話し合いをしなければなりません」

「私も、研究を進めたいからな」

「え？ あれ、み、皆さん？」

「ちよ、ちよっと！ 折角書いたのに見ないがや？」

呆気に取りられる千狐とやくも。それを尻目に、柳川を除く三城は、各々己の思うように解散していく。言い出しつべのフランケンシュタイン城でさえそれであるから、千狐たちが唾然とするのも無理からぬことだった。

「……ど、どうしましょう、これ」

「見ちゃっていいのかや……？」

残された四枚の紙を、恐る恐る手に取りつつ。千狐とやくもは、ちら、と残った柳川城を見る。彼女もまた、困った顔で二人を見返していたが――やがてその唇には、柔らかい微笑みが浮かんだ。

腰を浮かすと、殿に向かい、丁寧な去り際の挨拶をする。殿はそれを見て、何かを心得たようであった。いつもと変わらぬ微笑みで、去り行く柳川城を見送る。

「千狐さん。やくもさん。それは、ご覧になって構いませんよ」

「い、いいのですか？」

はい、と柳川城は穏やかに応えた。座敷には、ゆるやかな春の日差しが差し込んでいる。空白となった三つの席を、陽光がやわらかく照らす。去りながらそれを見つめる柳川城の目には、その陽光によく似た、しずかな色が宿っていた。

「……きつと、その答えは、ここに私たちがいるからこそのものでしょうか」

さて。

四枚の紙に書かれた名前は、いったい、誰のものであったか。

否。そもそも、それはひとりだけの名前であったのか。

すべてを知るのは、耳を立て、目を丸くした千狐。それを覗き込み、破顔するやくも。そして、四城が去った後の席を、微笑んで見つめる殿だけが知っている。

――いつかどこかの、誰かの所領。

――在り得なかつた縁を、この場所で確かに結んだ、誰かたちの話。